むめの枝

十二

詞を若ときわ

[V. 32]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 32
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

37

源氏廿九少の正二月のうすき

れもぞさのこと。そしいそぐれこころをさそてよれつる

なしず。善家もおなじ二月まれりうかりのこと

をへかれば。やがてれ家りもおつぐくべきや。正月の

けごまりなれば。おほやけまたくしのどやかなるれ

ほひに。焼地合なふ。大武のまれる番どもれ

ずりに。なをいましへのよはをとりてやあらんと

そして。二条院のれくしあけさせなて。かしの

もれぞとりけるさをなふて。れらんじくらぶるに。

ましさあやなども。れかこさもれこそなつしう

こまやかにはありかれとて。ちかされしつしひの

もれくおほひ。そうさ地そとれなどのそしぞに。古侯の

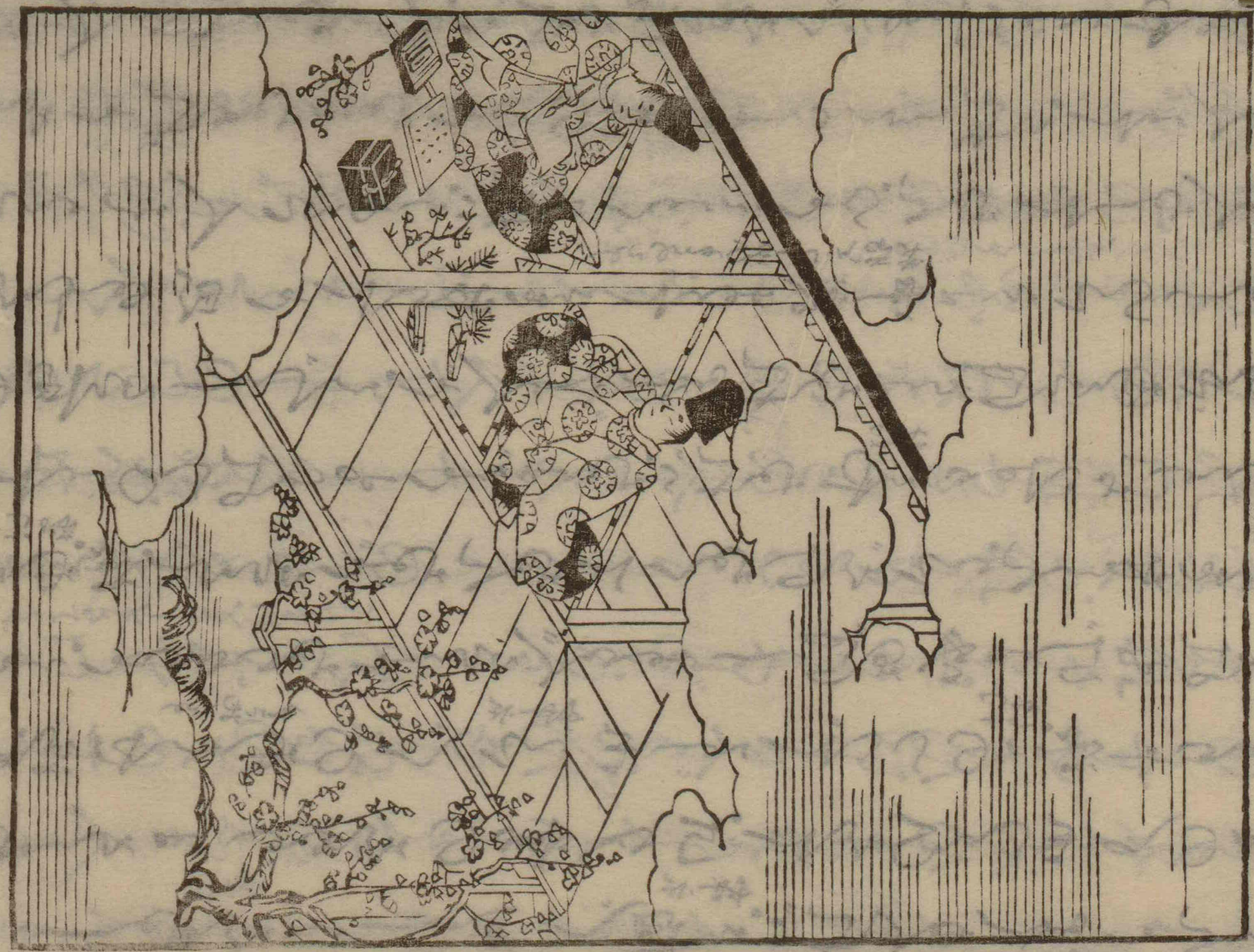
れ世のくじめつるこまうどれとてまつれりけり。
おやひえんさぶなどぐ今の世の物に似ぎれさ面ぐ
れらんじあてつてきさせぬて、このたびのおやう
すもれなどハ人々に語りすがうどもハ昔今のさり
なしべきをのて、れ（女中云）ぐにくだりまし世語、ふる
くさづくあくきさせぬへとさくしさせたまへ事。
とくり物に遅了のろくなど世になさき面に、間にも
とにもしげくいとなきぬにそへて、ぐ（女中）にえりとく
のへてがなうすの者こうしかましきころなり。
（源）おとぐハしん殿にもなれおりしまして、そむつうの
れいりしめれかたろのほうを、いくでかれこうには

つゝへぬひかん。心にまゝめて合ぬふ。生うへもひんがし
のなれまちいでてり。れまりひことゝ
ゆうまれさせぬゆて。八葉の或ゆゝの（平康親王之）れゆうを
つゝへて。かゝこゝまいどゝあいをのふほど。いうじう
ひしぬへば。まほひのゆうさあさゝも膳（ゆうまけ）負のさゞめ
あるべしとおとゞ（係）のぬふ人のれおやげるされあら
そひごろなり。いづるゝまもなまへにさふふ人
あまるゝなるぞれでうどもくそこらのさゝらを
つゝしぬへる中にもかうこ（係ノ香薑芸）のれもことまれやう
つゞのすゞゝひとりのころゝどもめるれぬさ海に
いまあしうやうへさせるまゝるにさろくの

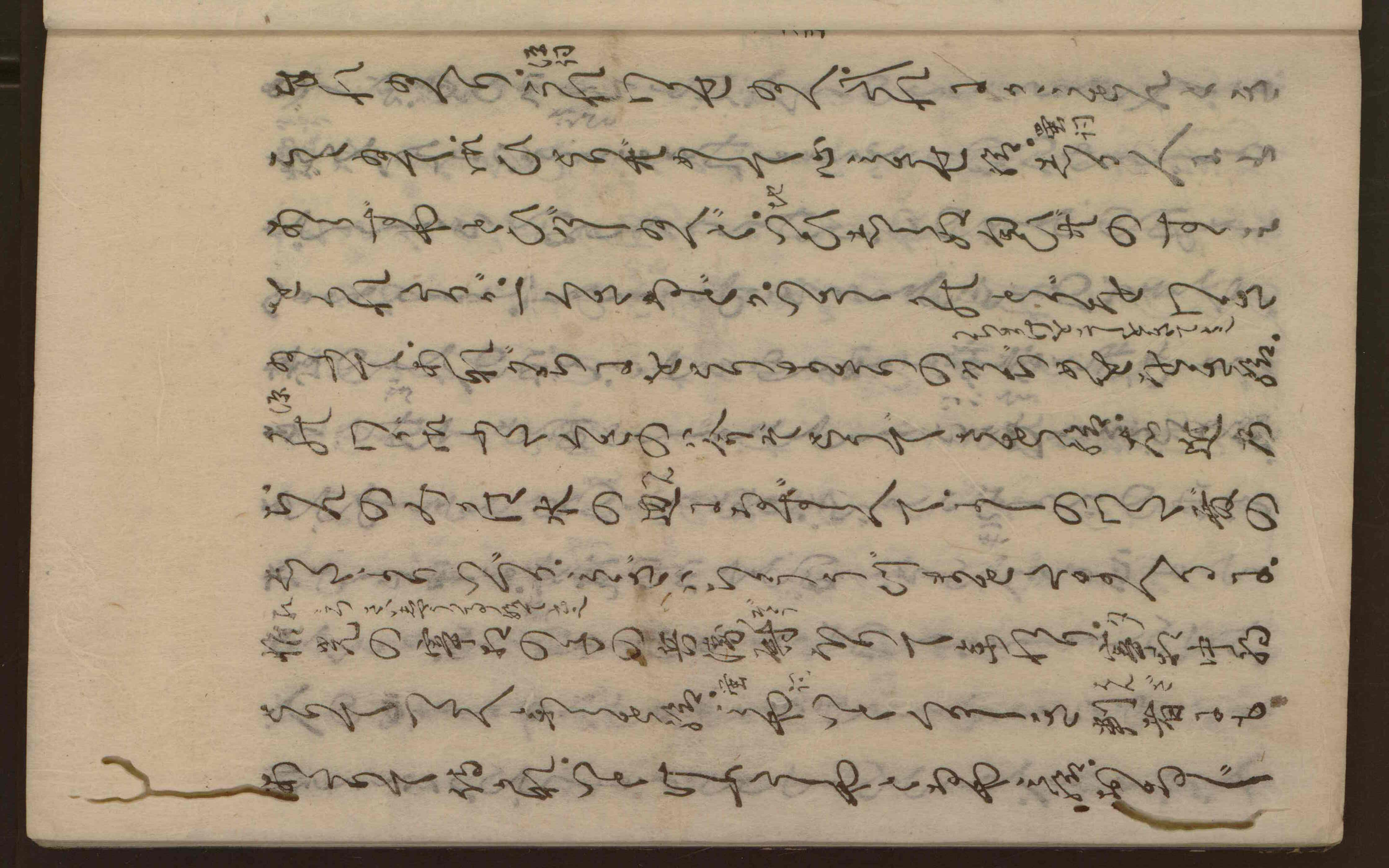
ぞろをつくしぬへらん白ひどもれ、ぞくれたらん
どもを、かさあそもそていれんと思ひ出りて、二月の
十日、夜すくしふりて、おまへちかき紅梅(こうばい)さかりなり。
夜もうちまろもれなさ程に、(蛍)芳しの夜つゆりぬへり、(河)
いそぎのかふあすは此ほけうこと、とふしひきえ
ぬふむかしよりとりつきたるれ中なれど、(つぼ)隔なく、
そのことかれことなく、里もあつをのて、茶をめぐ
つかたするほどに、(槿)前院よりとて、ちりすきたる
梅の枝に付たるれふこもて、(蛍)夜さうしめすこ
ともあれば、(河)いかなるれをうそこのすこ来れるよう
とて、かかしとおぼしとれば、(涼)ほくゑてい(河)となれ

なき袖合てとあと法りしを
なれしきことをきくしつけたりしを、まめやかに
いそぎまれしぬへるなりとて、此(地)ゆこはひさ
りくしぬひつぢんのことゝ、ふりのつぼゆたけ
すへて、物はさまさまろしつゝいれぬへ、心ぞ、こん
ありまは、武(えう)紫の枝(えだ)、しろきまは、物をえりて、おなじ
くひさむすびしろいとのさ夜も、なよびかなる夜め
しうぞ志ぬへる、(蛍詞)えんなるもれゝさ夜なるとて、此
めとめたまへるま
(桂)
菓のはちりし枝にとまりしねどこつらん
袖にあきくしまめや、(地)河のうちなるをしらんしじり
けて、(蛍)家いことくしうずじ法、(タ)宰相の中将、(ミつひ)此使

ぶるとじめさせまして。いさう思りしぬふ。こうぞい
がきのうしの頃そながそへさう。女のさうぞくか
づけ給。此迎もその色のうちまそ。おまへの（梅ノ）もちなを
あしきてつけさを給。（蛍河）宮うちのことぶひやうすれ
文れ。はづすのうくろへあるよか。ふくかくし給
とうしそ。いとゆしとえしさりぶ（源河）なまばとかい
ねんか。ふ面ぐしくおぼしさうこそくるしかれ
とて。此規の門いでる
（源）これのえまいとどそろせきむかれ人のとが
めんかをがつてめど。（地）とやありつてん



（源詞）やうなはすくさき構あれど文もあるめる人ひ
うへまそ・これにそいへとりのいとあまてあれとぞふ
あへらしてあん・いとこくへれば・いとこき人もいく
ちいさきさ・中宮（秋好をいうゆひまとのよう）までさをなりてと思ひあつむ・
あさきさいほど・あれ思しらべど・ちうずして家の
あうおいそすこ（秋好）やあれば・おほむごともきれつゝうそ
ことをなんかくまだけあくてあんちまでききて給・（蛍詞）おえ
あれもげは吟ばしよいべこそとおありきと・こと
ありや給・（源詞）このついでにいれらく（常元）のあふせ給ぞ・
なのくれつらひまそ・ぱ夕暮のありけるころ
こんと男のあへれば・（常元）さ侮ぐおいしうきあして



はうこそはいづくにもちりつゝひろうべかめるを。人
人の心ごとに合給つる。かゝさあさくをかざこあるを
のへるに。いとけうあること。おほかりさしりいづれ
をあるき中に。秀倪(槿)のれくろぼう。さいへども心にくく
しづやかなる自ひことなり。ぞうにおとぐのれぞ。
とぐれてあるあるしさかやとさぐめ給。
基のうへ(雲)のれぞこゝろさある中に。梅菅(ぞいくを)られやうに
いまめしうずうしもやこさころしひをうへて。
めづらしさかほりくちくれり。このごろの風す
こゝろんにはさしにこれにまさるにほひあらじと
めぞ給。夜のれかるにはれ。へくのかう。こゝろぐに

いどこ給ある中に、りどくにもたち出ずやと、
煙(ほり)をさへさひさえなへる此心にて、こゝ蔵(ク)葉(えう)を
一くさ合なへり、さ夜りちりしめやかなりして、衣
まなつし、冬の此方(ゆ石)にも、時にによれるまほひの
さゞまれるに、けたれんもあひなしと覚して、
そのえりのほうすぐれたるハさきの弟羅院のを
うけさをなて、公忠(きんたゞ)の朝臣のことにえらひつかうまつ
れりし、百姫(くゝ)の方(かう)などもひえて、よかゝぞな夜めし
さをさりあつめたる心をさてしぐれたりと、いづれ
ともむさくなしずさゞめ給を、こゝろぎたなき剃者(ほ)
なありとさしひ給、二月ノ初比く月さし出ぬれば、大こうさなど

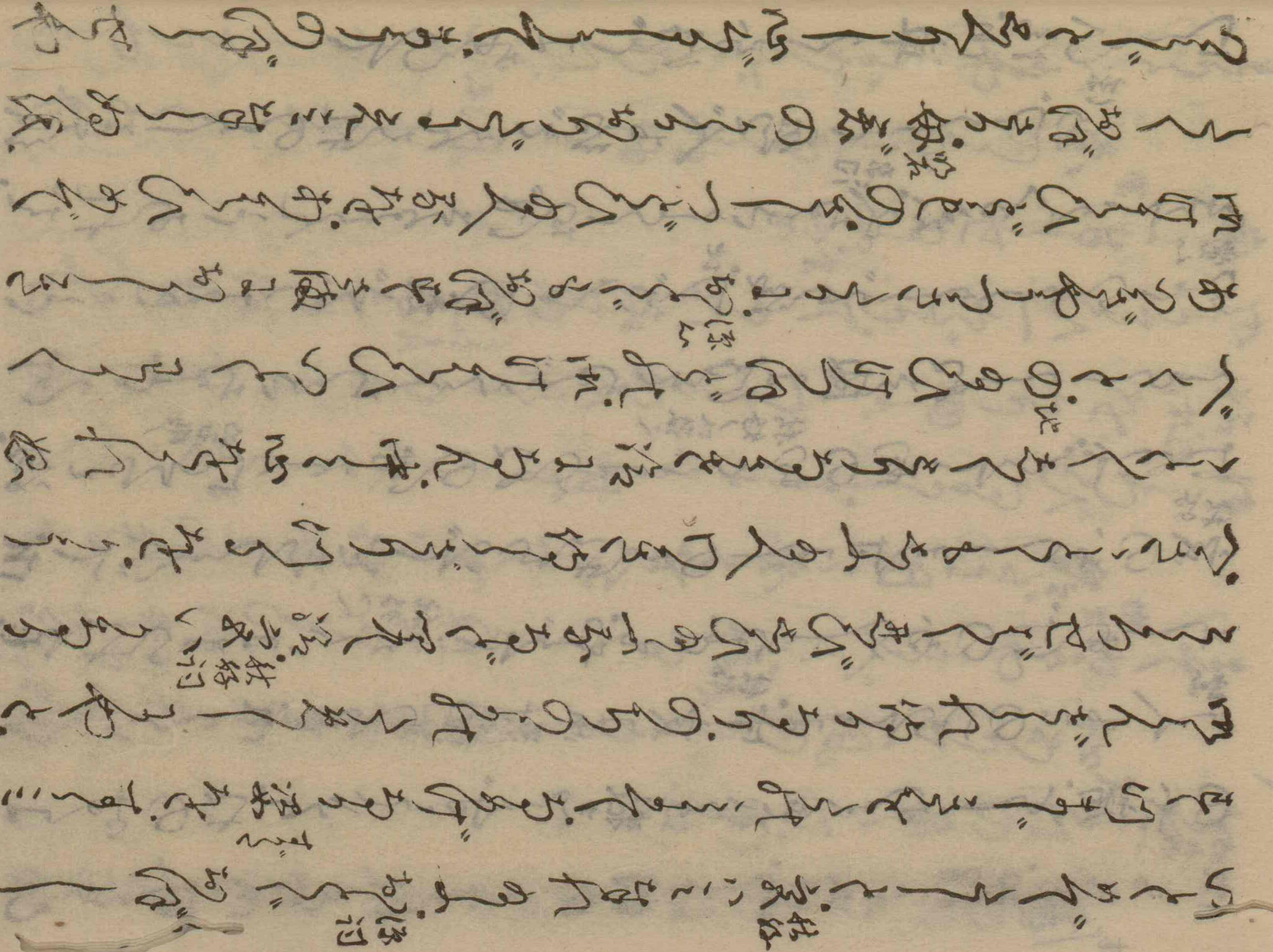
まして、音の拍子などし給、今めかしきのけうたろ
よく〱紙、夜のあづまの風すゞしく吹て、蕣の番あり
りしさま、おもしろくのあそりいひまいらず白ひさちて、
人の心ちいとえんなり、荒人のくらまも、おすの
れあそびのうちなりしまゝ、れこまたのかうりぞく
ありして、舞人などあまゝ集て、おりし笛の音だ
男、肉の拍子いとの乳中ね、弁かねなども、げさん
もりまてまうづらせ、とじめさせのて、れしくどし
めす、家のあまへまびも、おとくじありさまのれしく
まて、乳中ね和琴夜ありて、もちや夕かりきさ
さそうろ裎、いとおもしろくて、男も、寧ねの中ね、よこ笛

かきのかおりはあのくち調子(てうし)雲井とちかうちり
かきくさてちり。弁(柏ノ弁)かね拍子(ひやうし)さりて梅がえいづくにか
猶いとおかし。つゝへまでめんかくさのおり。嵩かうく
ひし氏あり。宗(螢)もおとゞも(源)さしいへ志のひて。
こゝしつゝぬ拙りし。おりしき衣のれおそび
ありけれくらしけまつみ。宗(螢)
(螢)箕のつ志はやいとゞあくがれんころ志ぬ
つ蛍のあくりみ。手代まへめべしとこてしのへだ
(源)冬ま番もうつゞりまこの世いきれさくやど
をくれずもあしるん。頭(柏ノ)中ねまくまへだし。ども
夕
宰ねノ中ねまさす

拍
鶯のねぐらの枝もちるびくまでちをふさと
とせよはの笛ふけ。寧(タ)ね中ね
夕
心ありて風のうぐめうちれのまよとりあへぬ
までふきやよろべき。情(まけ)ちくとこれ打ひ給。弁(拍ノ弟)ぬ
拍ノ弟
麗ぞに月と芸とをへぐてずハねぐらの鳥も
はころびちまし。まことに明ぐらに成てぞ。芸文人り
給。汎(添)をくり抽ぶこづしのれれうのれちをし乃
れよそひ一ぐぐりてふれ給ひぬ焼(こさもれ)抽二川ぼそへて。
車にまとせぬふ。芸文
芸
芸のをえちらぬ袖にうしまてことあや
まりといもやとがめん。とあれば。汎いとくしうやと

けしひ給ふ。此車くるほどにをひて
めづらしと思へ人も約ぞこんもれのかしこう紙
きてくるる志。又なきことしおぼさるんとあれば。
いといたうしがり給。つざくの志ぞちまもことと
ことしかしぬさ返に。ほそちまがこうちきなどかげ
けなふかくて西のおとじまいぬの時より口なる給。
宮のおりしますましのもれちいでをしつゝひて此
くしあげのかいしなどもやがてこちらにまいれる。
うへもこのついでに。中宮は此對面あるも此かくぐ
の女房をしあまをこう救しぞこしうれの時に
此もなり。おほとなぶらほのかなれど。此けちひ

いとめぞうしと。家(秋好)ハこなれぬふ。おとゞ(源詞)おぼし
まいまじきをとれこゝまて。ちゝめげなる姿(すがた)を。すゝこ
ゆゑんだゝれ侍りなり。のちのよれこそしまやと。
こゝろせだく思ひ出ひ。一家ちど罪し給。家(秋好詞)いかなる
べきことゝもしふ。ゆへ口き侍しざりけるを。うう
ことくしくさりなきを治にちん。中々心をれ思
べくと。のぬひけつほどれ。れけれひいとゝ。
あつぎやうつさゝるに。おとゞ(源ん)もおぼしさ後におしき
れけれひどものさしつどひ。ゆへ家を。おもひめぞ
しくおぼさる。母(明石)若のうゝなりざるえこなしぬ紙。
つゝじとしへりし心ぐるしうて。まうのぼしせや



をましとおぼをど。人の抱いひをつゝそゑし給つ。
地うゐ所の義式（ぎしき）ハ。よろしきざまいとことおほく
うゐさゝ紙。かくこしぐり例のしどけなくまね
ばしも。中くまやとてこ夜かくうしぎ。長宴志法
元服ハ。大よ日のほどまなんをけり。いとおとなしく
おりしまをば。人のむすめどもさをひまいしまべき
ことを。心ざしおぼしてなれど。此夜のおぼしさざす
さ夜のいとことなれば。中くまてやまじらもんと。
左（右づゐ女御ノ父之）のおとゞ。左（祖ともなし）大ねなどもおぼしとゞまりなりを。
（源ノ）こゝうしめして。（詞）いとゝいぐしさことなり。文仕志
すぢハおまゝある中ニ。すゝしのけぢめをいど

まんこそはいちしめ。そうしのさやうさくの姫ぞ遅
のひきこめられなば。よよもへあしじとのまひて。此
まりのびぬつきぐまもとしげめ給けるを。かくな
よしころくまきくまて。たゞ此殿の三のさこ来
まぬ。三志ノ事 蘇景殿ときも。この此 明石姫 ゝもひしの此と
のね所 桐つぼノ事 しげいさをあしゝめしつゝひて。此と来ると
のびぬるをこゝや 玉文 まも心もとなしゝせぬへぞ。四月 添
まとさぞめきを給。此でうどぞもとあるよりも
とのへて。此こづしも。地のしるゝ忍やうなど
ともはんじいれつゝ。すぐれたるこうちくし志
しるどもめしあつめて。こ度なまこがきとのへ

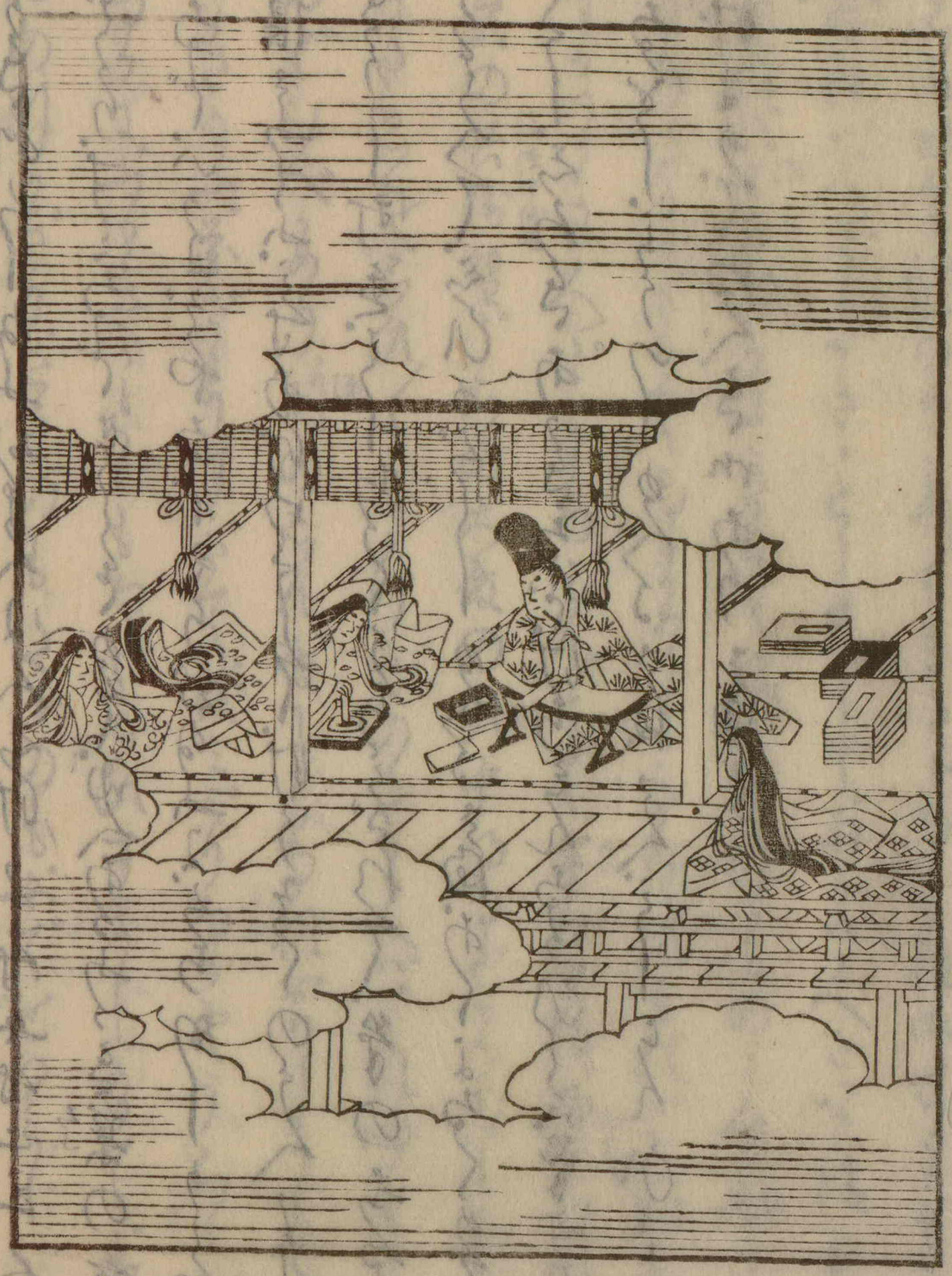
さき給ふさうしのもとどもはいかべさきうしだの
やがて本(かん)にも志ぬふべきをえらせ給いかしへの
うえちなさくいのれるだの世にちなをのうしぬへる
うぐひのもいとおほくさふしふ(源詞)ようげのうと昔
にいをとりぐ夜に。あさく此り世のすゑなれど。
んちれえちん今の世にいとさはちくちりうろふさ
あとにさぐまれつやうにはあれどひろさ心ゆたか
ちらず一すぢにうらひてちんありけるへにおか
しさことちどうりてこそかさいげるひとぐさ
(かこすゑにちうそん)
れど女でをこころにいれてちらひしさりに。
こともちさるなおほくつどへさうしちりに中(秋好)宮の

たくれ息所の。こゝろにもいれずもし里かいたまへ
まし。一ぐりぐりワぎとなしぬをえて。さいことに
おぼしたや。さてあかまじきれなもとて罵して
しぞかし。くや（此息所ノ）志きことにさひしたこゝのへりしかど。
さし（ほノ）もあらざりけり。こや（秋好）にかくうしろこ川かう
まつることを。こゝろふかうなきしかば。なすされか
げにもこれをし給へん。こや（秋好）のれては。こ後かに
おしげなれど。かどやをくれくんとうちさく
めさてきてしぬふ。右入口の（右つぼ）家のれてはいとかしこさ
ふかうち後めさこゝろすぢはありしかど。よもさ前
ありて。すほひぞすくなりし。院の内侍（勝月）のことそ。

今の世のごとくまおりすれど、おまりそぼれてくをぞ
そひこめる。さはありともかれ（勝）恵と、前（権）新院と、（堂）こゝま
とこそいりさ給ものめとゆるしきこしこまへば、（堂詞）この
かずまいまぐゆくやと思ひしのまへば、（源詞）いさうなすぐし
給そ。まこやかなるくのなつしさはことなるか
もれを。まんなれすく（まイ）こゝろほどよ。かんなはしどけ
なさもじこそまじ。かめれとて。まざかねさうし
どもつくりくさへ。表（へうし）紙ひもなどいうじうをさせ給。
（堂）笠（ゆ）の家。左（諸ともなし）清つ繪などよもれをん。（源）こげりしひとく（一翌）
ようひいくべし。（堂ちとノ）氣色ぞこいますりとも。（源ニハ）えりさ
なしべじやと。（地）ひれぼめをし給。（すこ）雲（かで）草なしびなく

えり出て、削のところくまとゞなしぬれせうそこ
あれば、人ぐらさゝとよ覚して、おりゐ人さゝ給を
あれば、(添)まめやかよさてし給、こまのこのうすやう
ごちらうが、をめてなまめしきを、此もれごのこ
すゝつきさ人ぐらろうんとて、寧(タ)ね中ね、或(芸人)りつの
家の芸清(後添中御云)繪、うちの大夫の乳(柏)中ねなどよ、おしで
うゝ思を、むひくよかけとのゝまへ、ごえれ心ごよ
いどしべかあり、削(添)のきんぞ、まもなれおりしまして
うさのふ、茶ざうすぐて、浅ミどりなる兎うちくゝ
なるよ、ふるさゝとしもなどさひすましのて、出
心のりかざり、さうのもとゞのも女でをいうじう

うきけくしぬふ。おまへまへ人をげうしず。女郎二三人
ぢうり。すまちなどせしをめて。ゆへあるふうき集の奇
など。いかまぞやなどえりしぬふまふらちおしかしぬ
恨さふふ。三寸あげけてけうそくのうへ。
さうし打垂。としちくうちこぞれて。筆のしるを
くさへて。しひめぐしぬへるさ面。おくよなくめで
こし。しろきあるきなど。けちえんなるひしハ筆とり
なをし。ふうりしぬへるさ面さへこしらんひとい
げるめでぬべきれありさ面せ



芸(蛍)ゑ家ワたり給とさしゆれば、おどろきて、
れちをしたてまつり、れしとわまいりそへさを
ゆて、やがてまちうりいれたてまつり給、こゝ
家(蛍)もいとさまげなて、こゝちし、さ海よくあゆこのぼり
給ほど、うちよも人ぐのぞさてこなり、うちうし(蛍)
まりて、かたこゝようちしぐちくまへ家も、いと
きこゝらや、つれぐ(添詞)よこもり給も、くるしこさまで、ふふ
ゆへくるくころのけどけさに、おりよく、ワたりせ
ゆへるとよろこび、ワたしてまふ、かれ(蛍地)れさうしも
こゝをて、ワたりくまへるなり、かゝて、やがて、れ(ほノ)んん
ぜれば、ぜくれてしまあらぬれをと、こゝぐらにうどよ。

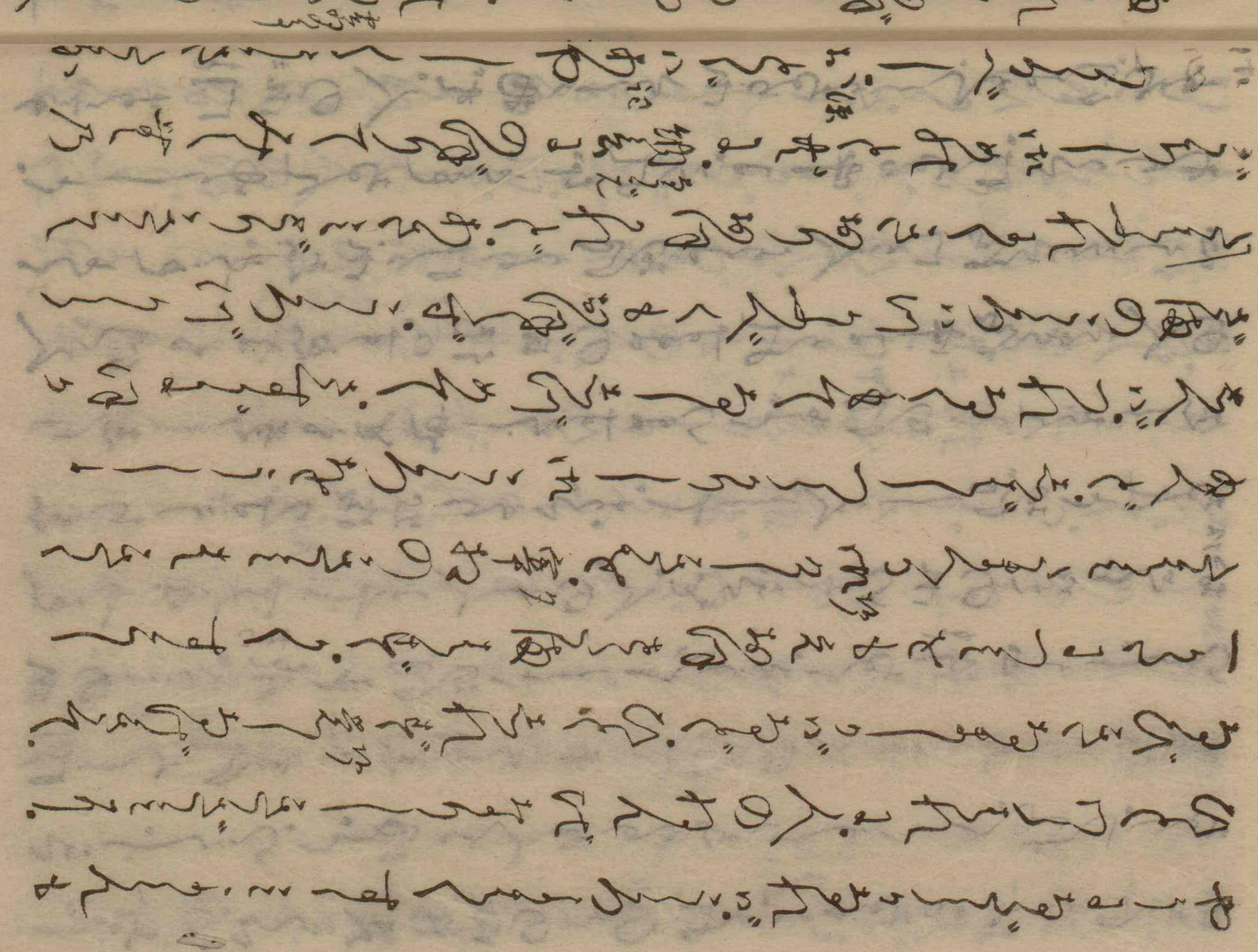
いといたうふぞ（されいちゃんに澄ノ字に）せたこゝろりしさありて。かさなし
うまへり。うたもとしめさ。そばこゝろふかと
どもとえりて。こゝ（前一首と三行にかくを云ふ）こゝろぐりぐりゝ。ことじずく
なまこのましくぞかさぬへる。おしとぐ（源）ゆんじ
詞 おぞろさぬ。かうまでいせぬへずそをつれ。さゝる
筆なげ（早下ゝ）すつべしやと。ねるがりぬふ。かゝる中に
おもなくぐ寸筆の程。さりともとなんせふぬふ
など。（地）ふもふれぬふ。（源ノ）かさぬへるさしだも。かゝし
ぬふべきなしのバ。さうぞのて。かゝこゝにゆんぜ。
うしのこのいとすくこゝろ（こゝろき紙に）ゝ。さうまかさぬへる。
せぐれてめでうしとこゝ（堂ノ）給ふこ面のこのもぐこ面

哥ゐどもことさらめさてえりかさらり。女乃ゐま
ほまもとり出給はず。勢院のゐどはまして云うで給を
ざりけり。おしでのさうしどもぞ。うろぐり
もらゐうおしき。寧ね中ねのは。水のいさほひゆる
かまかさちし。そしけらあしのおひざ海おまど。
難波のうしまかひて。こちるゝかるゝゆさまじまて。
いさうすえらゐあり。まるいとゝいめしうひさ
くて。文字やう。いしちどのくずまひ。このこうさ
ゐくるひらもあめりめもをよばず。これはいとま。いり
めべきもれれと。けうじめでゐふ。ちまごとも抽
ごのこし。えむがりおもすり。雲子まて。いとゝいうじう

めてきこし給ひしは又てのことゞもをの給ひしてさ風ぐのつぎゞこの中（巻抱之）どもえりいぞさせたまへるついでに、（栄ノ）此子の侍従して、（栄）えやすさつくふなぜよりまつり寺、さがれこうどの古百（こまん）集（えうしふ）を、えらひうしきこまへる四巻（よまき）、延喜のこうどの古今和歌集を、かしれあさまちぐのことをつぎて、おなじ名乃こさもんのうしのきのへうし、おなじきの軸（ぢく）ぐんのうしくこのひもなど、ち風めりしうて、まきごとにれものすぢをりへていこじうりき川くさきのへる、おほとなぶらこ（切灯垂）じうくまいりてゆしんずるにつき（添付）きぬ抱れ、このごろのひとも、こぐらさ

そだちを氣久ばむまゝそありゆれなどかで給やゞ
先ハとゞめなり給。女ごなどをもて給ふまゝ
めさく見えもやすましこさまは川ふまじこさ給。
ましてくちぬべきをなど寄して。なれなふ。侍従（源 葉ノ中子）
（比）りしの中などのいとゆゞとがましきだんのそこ
いれていうじきこ庵留へて。なれなふ。まる（源）此代も
さゞんなれさゞめをしなひて世中にてくと
なぼしさる。かゝ（上）ありし（中）ものへ（下）ぐにも。さるべきも此ぜ
なぼしまゝひて。さゞ申てゝ世給。此代（昭君姫ノ之）もこまは。
こちくだれるとがまぎ給ひず。ワざと人のほどしれ
ゆゑなひつゝさうしまゝ抱これりく皆生里。

ゆゑげまめづらかるれ、そうし抱だ。人のれ門(ミ)とまづす
ありがたげなる中に。これがどもなんゆしと。
心うごさ給ひ人よりおほかりけれ忍どもとく
のへさき給中に。かれすまの日記に。すゑにもいへ
もしきんとおぼせど。いますそし世をも覚しきり
なんとおぼしへして。まださり出給ひず。うちき
おさだいこのれいそぎを。人のうへにて罪あるも。
いうじう心許(まと)なく。さうぐしとおぼせ。娘(まめ)ぎこのれ
有様さりにもくのひて。おそしきう主のうしげ
なり。つれぐとうちきありのへるほど。いうじき
れなげさぐさなるに。かれひ(タ)とのれ気女もる。いるじ

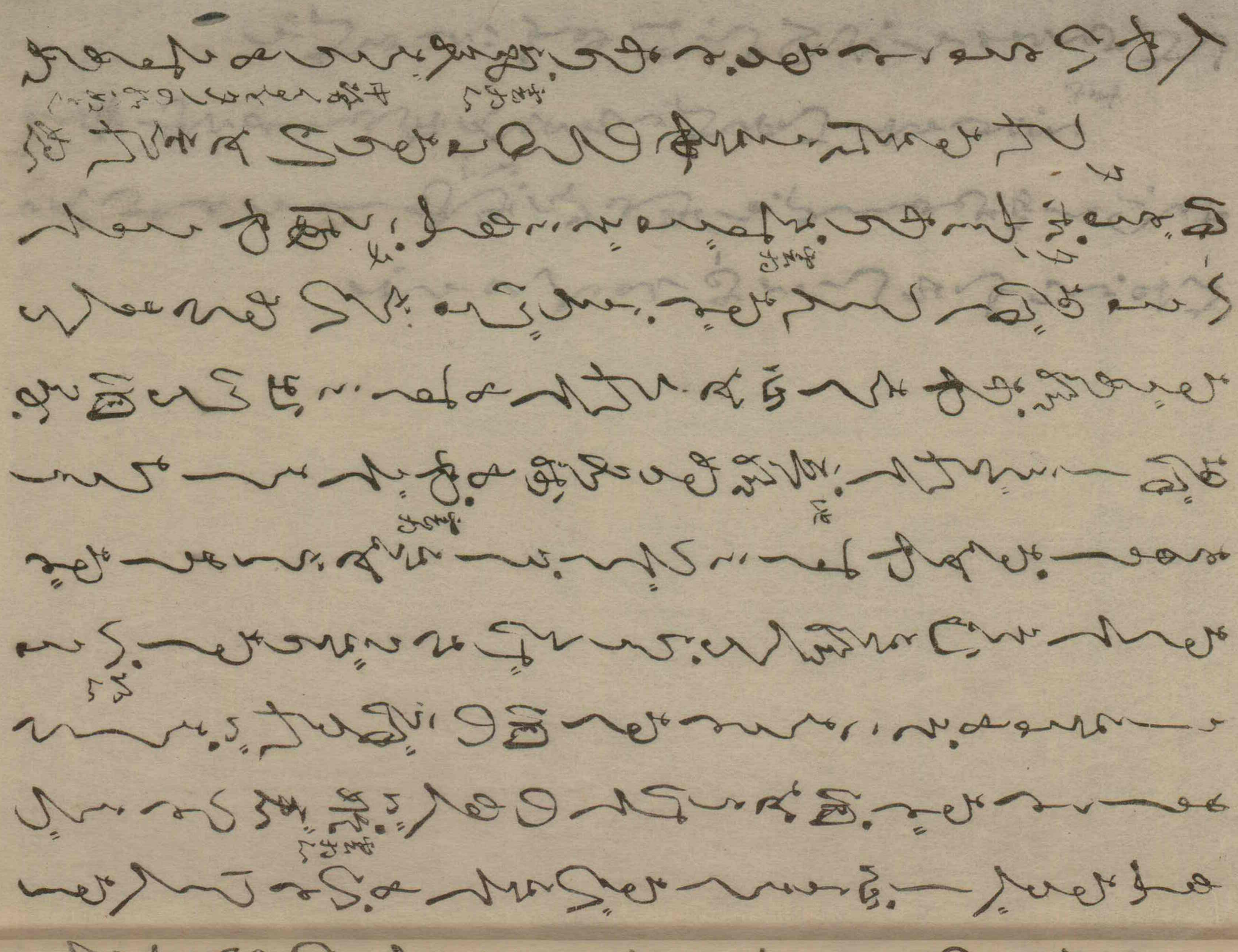


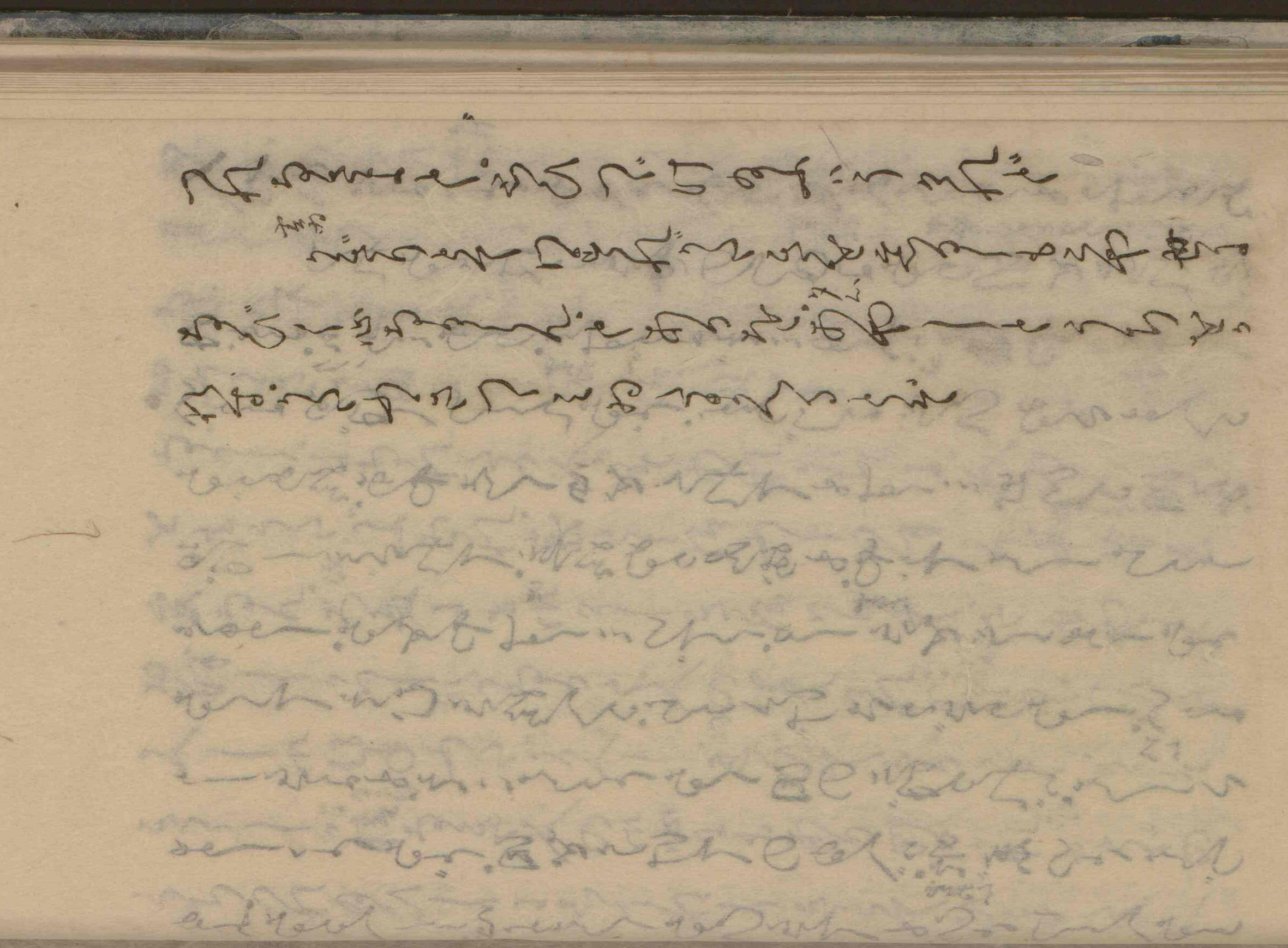
き面かれとおぼしなやえて。かれ(雲ぬのうす)ワたりのことに
えしまたしば。右(泄ともなし)のおとゞ。中務(なり)(づかさ)の宮(泄ともなし)などのりしこ
ぢといまを給めるを。いづくもさひさぶめられよと
のみへど。抽(タ)も見し給りずりしこまりたるさ面まで
さふしひ給。(源訓)りやうのことはりしこさ(桐つぼ帝ノ)れをしへる
ごま。(源ノ)さらがふべくもおぼしざりしかば。ことまぎ
まうかれば。今さひありするはかれれをしへこそ
なげきこあしはありかれつれぐともれされど。
さふ心ありまやと。世の人もとしもうるんと。すくをの
ひくらまて。なをくしきことにあるまくて
なびく。いとしりひ(以手さぐりとこ)ほ人ワろきことぞや。いこじう

をひのぼれど。心よしもあらず。恨ある物しはすゞ
ずさし。心つかず。かつけ。たくより。家のうち（添ノ）
よりおもひ出て。身と心よまゝもあらず。東もくはさしれ
まことのあやまりもあしが。うろく。たゞさそあり。とかや
ともんとつくしづる。ちるとすまぐ。たゞさとがを
おもひて。よろこしくあれば。きゝわたく縁と
なきゝ身の程。うちとけ心のまゝなるふるまひなど物
もしるが。心ものぐしとこりぬれば。さも思ひ出げ世
（一人にかなひよくなるなきを）
べきならひなり。さきに。女のことまで。なんぢうしこく
人昔もながくあしかんきけるが。何まじきことは
うちとつけて。人の名をもたて。みづからも根とおも

なん。はねのほどしとなりける。さりあやまりつ
えん人のワがこころまかれいず。されどんことかくさ
ふしありとも。れせひ人さん心をなしひて。もしは
おやの心まゆづり。もしは（女ノ親なくたりなき時ハ離別をぬとしき）おやなくて。世中かくほま
ありとも。人がしこころぐらしくなどあらん人をば。
それをかくなどまよまてもこまへ。我こあ人の
こめ。つねまよりうべき心ぞかりあるべきなど。
のどやかまつれぐなりありは。かくこころづかひを
のこをしへなふ。かやうなりけいさめてりけきて。
こそふれまてもはかぎ後の心をせひかくは。長ま
人やりなしぞおほしなふ。女（書ぬん）もつねよりいとま。

おとぐのさひ器(なげ)きのへるれ氣文にさぐしうまき
身と見しきげめどうへいつれなくおほとりて
ながめすぐし給。(地)れ文いさひあまり給ありく。衣に
心かきさ海にきこし給。氣がまことをかと(青ノ)さひ
ながし。よなれたる人にそあれがちに。人のこゝろ
ともうたがふなれ。衣とこ給かしおほり。中(誰ともなし)務志
家なん。(源)大夫にもれかしこ給りて。さもやと
おぼしかりしなるとゝ人の罪なれば。(公)おとぐいひき
人しれむるかたがるべし。(司)思びてさうことをこそ
きこしが。(なきけ)情なき人のれ心にもありけるれ。(源)おとぐの
うちつれのひしにきこしねりきとてひきこゝろ





つれなきよと。ぢひつでけのふいうれど

（言ゐ）うぎりとてはきれがてきをさるしもこやせる

ちびく心ちゆらん。とあるをおやしとうちを

れまうらゆさつてそゐこまんるとぞ

69038
6AP78